

告別誄詞

これの所を暫時仮の齋場と齋い定めて 令坐奉り置き据え安め奉る故天理教〇〇前会長
△△△大人の御柩の前に天理教 分教会役員 恐み敬いて告げ白さく
あわれ汝主の御骸をこれの所に安め奉りて 御葬の式典仕え奉るは これなも現世の
終の別れの綴目にしあれば 親族家族は申すも更なり 親しき人等信者諸々に至るま
で 深く偲び遠く思いかえして嘆き悲しみ仰ぎ慕い奉る心限りなかるべし 吾も亦副
齋主として汝主の一世の事蹟思い出列ね称え偲びて 人々と共に永き別れを告げ奉ら
くと聞食せと白す

そも汝主はや大正 年 月 日△△△△と△△△の次男として生れ給い 幼き間
より人に優れて聡く怜しく 子とある者の道を違えず 菅の根のいと懇切に父母に仕
えて孝養の道をつくし給いぬ 汝主早くより信州を出て 花の都に憧れ 鈴ヶ森なる
〇〇商店に務めおりし時 くしき縁のまに△△△子と婚姻て妹背の中いと美しく
二人力を合せて△△△商店を開業せり 年毎に店は栄え 娘二人を挙げし頃 妻の知り
合いより天理の教えを聞き いたく感動して早速おぢばがえりをせしに何たる天の計
らいにか 俄に長女〇〇子は悪しき病に罹り 医薬の効なく 永久に帰らぬ身となり
ぬ この悲しみは如何ばかりにか 大人はこの大節に心倒すことなく 益々この道を
尊信び 昭和〇〇年四月おさづけの理を戴かれたり その後女三人男二人を授かり
色々忙しい中にをいがけお助けに奔走され 店員を始め知り合いを次々とおぢばへ修
養科へと送り仕込まれたり

然るに昭和 年暮 突然交通事故に逢われ 一命も危ぶまれしに 奇跡的な親神の
加護を受けられたり この節に魂の因縁を悟られ 神一条の道を定められ 直ちに自
ら修養科へ入られたり その後家業を捨て 近くに細やかな住居を借り受け 単独布
教を始め給いぬ その翌年教祖年祭の直前 教会を設立せり
大人は教祖雛型の道をつぶさに踏み行わむことを御心となし給いて 憩う間もなく信
者を教え導き 百千の憂きに耐え辛きを忍びて 教えの道に励み給いぬ かくて大勢
の教人信者に守られ 更に次々と神殿並びに教職舎を増改築されて 形のふしんも整
えられ 名実ともに堂々たる教会を造り上げられたり

昭和 年より十数年間〇〇支部長を受けられ 尚〇〇年には修養科一期講師をも務
め給いぬ ここを以て人々には敬い尊ばれ 世の真人と仰がれつゝありけるを 後継
者である△△△さんの成人をみて この年の春教会長を譲り 盛大にその奉告祭を務め
終え給いぬ 然るに程へて身上に疲れが目立ち暫く入院されしが 充分な回復を待た
ずに又勇んで布教に飛び出されたり されど親神の如何なる御量にか 突然病に倒れ
医師の業も心尽くしの看護もその甲斐なく 七十五才を現世の限りと出直し給いける
は 悲しいとも悲しき極みにぞありける 実に人のこの世は果敢なく定め難きものと
は云えど 昨日まで相語らい睦びてありける大人の今日は呼べど叫べど答だになき御
姿になり給わぬとは誰かは思いかけたりし 故れ親族家族は打ち驚き 夢に夢見る心
地して 呉惑い愁い悲しむもさこそ理ならねど現世の定と慣しあれば 御葬の式儀執
り行い今し惜らしき御骸を埋め奉らむとするによりて ありし世の事々思い出するが
まゝに 誄詞告げ奉らくをうまらに聞食せと白す